

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520560

研究課題名(和文) 関係詞節・分詞節が主節と結ぶ論理関係とその決定因子に関する日英対照研究

研究課題名(英文) A contrastive study of the relationship connecting the main and relative/participial clauses and the determining factors in English and Japanese

研究代表者

田中 秀毅 (Tanaka, Hideki)

摂南大学・外国語学部・准教授

研究者番号：50341186

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日英語における分詞構文と関係詞節の主節に対する論理関係とその決定因子について考察した。英語では、関係詞節は分詞節と異なり、独自の主語(すなわち、関係代名詞)をもつため、主節との論理関係を定めるプロセスが、分詞構文の場合よりも複雑になると主張した。つまり、関係節では二つの‘完全な’節どうしの関係が考慮されるということである。また、本研究は、関係代名詞が形式的に具現しない日本語における節関係についても考察した。関係詞節の先行詞の指示性が主節との論理関係に影響することや節関係が数量詞遊離文の容認性に影響を与えると主張した。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the logical relationship between the main and the subordinate clauses, and the determining factors in English and Japanese. In English, the relationship between the main and the relative clauses has more factors than the participial clause, because relative clauses, unlike participial clauses, have their own overt subject (i.e. relative pronouns). In other words, in the case of relative clauses, the semantic and pragmatic relationships between two full clauses are taken into account.

This study also examined the clausal connections in the Japanese language, which does not have any relative pronouns. It was argued that the logical relationship between the main and relative clauses is sensitive to the referentiality of the antecedent. This logical relationship then affects the acceptability of floating quantifiers.

研究分野：英語学(統語論・意味論)

キーワード：日英対照研究 関係詞節 連体修飾節 分詞構文 論理関係 理由・条件 指示性 タイプ・トークン

1. 研究開始当初の背景

次の各文に含まれるような関係詞節と分詞構文は、接続詞を伴わなくても主節に対して一定の論理関係を表すことがある。

- (1) a. The students, who had failed the test, wanted to try again.
b. Having failed the test, the students wanted to try again.

両文は、主節と従属節が因果関係にあると解釈される。すなわち、関係詞節・分詞構文で表される「(学生が)試験に落第した」という事態が、主節で表される「(当該学生が)再度試験に挑戦したい」という事態を引き起こしている。また、分詞構文・関係詞節はそれぞれ、主節に対して条件関係や譲歩関係なども表しうるということが観察されている (Talmy (2000)や Ziv (1976)を参照)。

主節と従属節の論理関係を決定するメカニズムは、2000年ごろから研究されている。とりわけ、Talmy (2000)による分詞構文の認知言語学的な分析は、Figure-Ground 分化の概念を取り入れ、主節と従属節の論理関係について興味深い示唆を与えている。(1)では従属節である関係詞節・分詞構文がそれぞれ Ground として認知され、主節が Figure として認知される点は並行的である。ただし、両者の因果関係の解釈が同一のプロセスで導かれているかと問われたなら、それは異なると言わなければならない理由がある。

申請者は、予備研究 (田中 2012) で非制限的關係詞節 (以下「非制限節」) が数量詞と共起する場合に見られる文法対立を考察している。

- (2) a. *All the students, who had failed the test, wanted to try again.
(Quirk et al. 1985: 1241)
b. All the students, who had returned from their vacation, wanted to take the exam. (*ibid.*)

田中は、(2a)の主節と関係詞節が因果関係を結ぶととらえられるのに対して、(2b)のそれは二つの独立した事態としてとらえられていると主張する。それは、次のように (2)の両文の主節と関係詞節を使役構文に代入したときに、(2a)の対応文のみが容認されることに基づいている。

- (3) a. Having failed the test caused the students to want to try again.
b. #Having returned from their vacation caused the students to want to take the exam.

田中(2012)は、非制限節が理由解釈を受ける場合には先行詞の数量詞 all と意味的に整合しないと主張する。

分詞構文 (独立分詞構文を除く) では分詞構文は主語をもたず、主節主語に依存する。申請者は、予備研究 (田中 2009) で主節主語に数量詞 all が含まれる場合には、次の例が示すように、非制限節と対照的に容認されることを指摘している。

- (4) All the students, having failed the test, wanted to try again.

(4)と先に見た(2a)は同一事態を分詞構文で表すか、非制限節で表すかの最小対立であるが、その容認性は逆転する。この言語事実は、分詞構文と関係詞節の理由解釈が同一プロセスで導かれていないことを示唆していると考えられる。

日本語においても、関係節 (= 連体修飾節) と主節の間に一定の論理関係が推論されることがあるが、申請者は予備研究 (田中 2010) で関係節と主節の論理関係が数量詞遊離文の容認性に影響を与えることを観察している。次の数量詞遊離文は、主節と関係詞節に因果関係が認められない(5a)は容認されるが、主節事態が関係節事態の原因として解釈される(5b)は容認されない。

- (5) a. [あなたの人生を一変させた]本を一冊あげてください。
b. * 山田は [その後の人生を一変させる]本を一冊買った。

関係節と主節の因果関係が常に遊離数量詞を排除するかと言えば、そうではない。次の数量詞遊離文は関係節と主節が因果関係にあるにもかかわらず容認される。

- (6) 山田は [飲むと悪酔いする]焼酎を一本飲んだ。

(5b)と(6)の文法対立を説明するには、因果関係を掘り下げる必要があると思われる。

以上から、分詞構文と関係詞節は主節に対して一定の論理関係を表す機能を共有していると漠然ととらえられてきたが、両者のメカニズムが同じでないことを示すデータも認められ、詳細な分析が必要である。また、日本語でも関係節と主節の論理関係が推論され、それが数量詞遊離文の容認性に影響することについてはその説明が必要である。

<引用文献>

- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
Talmy, L. 2000. *Toward a Cognitive Semantics*, Vol. 1. Cambridge, Mass.: MIT Press.
田中秀毅. 2009. 「関係詞節と主節の論理関係について」『英語英米文学研究』第17号, pp. 23-45, 広島女学院大学.

田中秀毅．2010．「日本語における数量詞と先行詞の意味関係について」『英語英米文学研究』第18号，pp. 1-26，広島女学院大学．

田中秀毅．2012．「非制限的關係詞節と数量詞」『英語語法文法研究』第17号，pp. 115-131，英語語法文法学会．

Ziv, Y. 1976. "On the Communicative Effect of Relative Clause Extraposition in English." Ph.D. dissertation, Univ. of Illinois at Urbana-Champaign.

2．研究の目的

本研究は、分詞構文と関係詞節を比較・対照し、主節に対する論理関係の決定プロセスの違いを解明することを目的とする。すなわち、分詞構文と関係詞節では、前者が主語について主節に依存するのに対して、後者は（主節の）先行詞と同一指示の関係代名詞をもつため自立している。これによって、節間の論理関係の計算過程で関係詞節主語（すなわち、関係代名詞）がカウントされることになる。例えば、関係詞節の主語に数量詞が含まれる場合、二つの事態で主語の数がずれると因果関係が成立しない。

- (1) a. *The students, some of whom had failed the test, wanted to try again.
- b. The students, some of whom had returned from their vacation, wanted to take the test.

(1a)では因果関係と見なされるべき二つの節が主語の数の不一致により強制的に断ち切られるために容認性が低下するものと考えられる。一方、(1b)では二つの節は因果関係にないため、主語の数のずれは容認性を低下させない。このように、関係詞節における主節と従属節の論理関係の処理と分詞構文のそれを比較し、両者の解釈プロセスの共通点と相違点を明確にしたい。

また、日本語の関係詞節（連体修飾節）については、奥津（1997）が非制限節は主節と因果関係を結び、制限節は主節と条件関係を結び、と指摘している。これは、英語と並行的な振る舞いである。日本語では関係代名詞が形式的に明示されないが、そのことが主節との論理関係にどのような影響をもたらすのかも明らかにする。

<引用文献>

奥津敬一郎．1997．「連体即連用？第21回 一般述語文と連体・連用の対応 その五 制限的・非制限的連体と理由構文・条件構文」『日本語学』第16巻，pp. 73-80.

3．研究の方法

本研究は、主節と従属節の論理関係を決定するメカニズムについて関係詞節と分詞構文を比較する。比較の観点として、次の二つ

を設定する。

- (1) 英語の分詞構文と関係詞節の比較
- (2) 英語の関係詞節と日本語の連体修飾節の比較

研究の進め方として、まず関係詞節と主節の論理関係に関する先行研究を整理し、関係詞節の種類（制限・非制限）や先行詞の定性を区別したうえで、問題となる論理関係の決定因子を探る。

次に、すでに認知言語学的アプローチによって分詞構文の主節に対する論理関係が研究されていることから、その知見を踏まえて関係詞節との比較を行う。具体的には、関係詞節は独自の主語をもつ点で分詞構文と異なるが、このことが節間の論理関係の決定にどのような影響を与えるかを考察する。

さらに、対照言語学的な視点から日本語の連体修飾節と英語の関係詞節を比較する。英語では制限節は条件解釈に、非制限節は理由解釈に結びつくとされるが、日本語でも同じことが成立するのか検証する。

4．研究成果

本研究の研究成果を年度ごとにまとめる。平成24年度は、英語関係節の主節に対する論理関係について考察した。具体的には、次の課題に取り組んだ。

- (1) 制限節の先行詞が定名詞の場合に主節とどのような論理関係を結びうるか。
- (2) 通常の関係節（非外置型）では、先行詞が定の場合に理由解釈が、先行詞が不定の場合に条件解釈が得られる。一方、外置された関係詞節（先行詞は基本的に不定）では、条件解釈に加え、理由解釈も得られると指摘されている。先行詞の定性と論理関係の組み合わせは、外置型関係節と非外置型関係節で異なるか。

(1)の課題については、不定制限節は条件解釈を許し、理由解釈を許さないが、定制限節は理由解釈に加え、条件解釈も許すことを明らかにした。この事実は、理由解釈が特定の個体（の集合）に適用されなければならないが、条件解釈は任意の個体でも、特定の個体でも適用されることを示唆している。理由の適用範囲がより限定されるのは、理由が理由であるためにはすべての個体に適用されなければならないが、結果として理由が適用されるかどうかで個体を抽出することができないためだと考えられる。

(2)の課題については、条件・譲歩の解釈が外置関係詞節と非外置関係詞節の両方で認められた。ただし、理由解釈の外置関係節については、さらなるデータ検証が必要である。Ziv（1976）が提示した、理由解釈をもつとされる外置関係詞節の例は、先行詞が総称名詞（句）になっている。しかし、上記の理由に

より理由は任意の個体には適用されないはずだから、総称名詞(句)に対して外置関係節が理由を表すことは予測に反する。申請者のインフォーマント調査では、当該外置関係節が条件解釈をもつことが裏づけられた。

平成 25 年度は、英語における関係詞節と分詞構文の意味機能を比較した。平成 24 年度の研究で、先行詞の定性によって関係節と主節の論理関係が変化することがわかったので、主語を担いうる関係代名詞を含まない分詞構文において、主節との論理関係がどのように決定されるのか考察した。具体的には、次の課題に取り組んだ。

- (3) 関係詞節の主節に対する論理関係の決定と分詞構文のそれはどのような対応関係にあるか。

Stump (1985)は、分詞構文が理由解釈を受ける条件として(4)を、条件解釈を受ける条件として(5)をあげている。

- (4) 分詞構文が「個体述語」(individual-level predicate)である。
(5) 主節が法助動詞または頻度副詞を含むか、習慣読みをもつ。

早瀬(2002)によると、(4)の条件は理由解釈が時間ドメインではなく、概念ドメインの解釈であることに由来し、(5)の条件は主節が表す事態のタイプ性に由来するという。

本研究は、以上の分詞節の特性が関係詞節と次のように対応していると主張する。先行詞が不定の場合、事態が数量的に限定されないため、タイプのな解釈になる。これに対して、先行詞が定の場合、主節の事態が数量的に限定されることになるため、条件解釈が回避される。

なお、(5)には、述語タイプ(個体述語など)についての規定が含まれていないが、個体述語は許されず、「場面述語」(stage-level predicate)でなければならないと考えられる。そもそもある事態が条件と見なされるためには、その事態が常に成立してはならないためである。実際、Iwabe (1986)が指摘しているように、Being a bird, I could fly to you のように分詞句が個体述語である場合は、条件解釈ではなく、理由解釈が得られる。

平成 26 年度は、日本語における連体修飾句・節と主節の論理関係について考察した。具体的には、次の二つの課題に取り組んだ。

- (6) 英語では非制限節は理由解釈に、制限節(非外置型)は条件解釈に結びつくが、日本語でも並行的か。
(7) 関係節と主節が因果関係を結ぶ場合に、日本語数量詞遊離文の容認性に变化が生じるのはなぜか。

(6)の課題については、英語と日本語で関係節

の制限用法・非制限用法の区別と条件・理由解釈の区別が対応することを示した。奥津(2007)は、「制限的連体」と目的・理由構文、「非制限的連体」と条件構文の対応関係を描している。例えば、次の例では連体成分の制限機能の違いで解釈が変わるといふ。

- (8) 塩辛い漬け物は健康によくない。

連体成分が非制限的用法の場合には主節に対して理由の解釈が生じる(「漬け物は塩辛いから健康によくない」)。一方、連体成分が制限用法の場合には主節に対して条件の解釈が生じる(「漬け物は塩辛いと健康によくない」)。要するに、(8)の理由解釈と条件解釈の違いは連体成分の制限機能に帰されるといふことである。

英語関係節の場合も、制限的関係節は(9)のように主節に対して条件を表すことができ、非制限的関係節は(10)のように主節に対して理由を表すことができる。

- (9) Snakes that are poisonous are dangerous.
(10) Whales, which have lungs instead of gills, cannot breathe under water.

(7)の課題については、日本語数量詞遊離文の容認性が関係節の主節に対する論理関係と先行詞の指示特性の相関関係によって決定されることを明らかにした。

日本語の数量詞遊離文では、関係節が主節事態の結果を表す場合に数量詞遊離文の容認性が低下する([]は連体修飾節)。

- (11) ?*山田は [その後の人生を一変させる] 本を一冊買った。

ただし、同様な因果関係であっても関係節が総称的名詞句にかかる場合には次のように容認される。

- (12) 山田は [飲むと悪酔いする] 酒を一本飲んだ。

(11)と(12)の容認性の違いは、関係節の時間的な特性の違いに由来すると考えられる。すなわち、「その後の人生を一変させる本」は指示詞ソ(ノ)が主節事態の発生時を受けるため、時間的に特定の事態を指すが、「飲むと悪酔いする酒」は主節事態から独立した非特定の(=タイプの)な事態を指す。数量詞遊離文では先行詞はタイプ解釈(非指示的解釈)を受けると考えられる(「その本を二冊買った」では「その本」は非指示的)。したがって、タイプ解釈を受けられない「その後の人生を一変させる本」は数量詞遊離文と整合しない。

以上が、本研究の研究成果の概要であるが、本報告書を執筆している時点でそのすべて

が公表されているわけではなく、一部については学会発表のための審査を受けていることを付記しておく。

分詞構文と関係詞節の比較研究には、さらに掘り下げるべき点が残されている。例えば、主語を伴う分詞構文 (= 独立分詞構文) における主節との論理関係と関係節の特性との比較などがある。

<引用文献>

早瀬尚子. 2002. 『英語構文のカテゴリー形成 認知言語学の視点から』東京: 勁草書房.

Iwabe, K. 1986. "Semantic Interpretation of Free Adjunct Constructions." *TES* 5, pp. 1-13, Univ. of Tsukuba.

Stump, G. 1985. *Semantic Variability of Absolute Constructions*. Dordrecht: Reidel.

既出の文献は含まれていないので、それについては「1. 研究開始当初の背景」と「2. 研究の目的」の引用文献リストを参照。

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

田中秀毅 (単著) 「分詞節と関係節が主節に対して表す論理関係について」『摂大人文学』査読有, 第22号, 2015年, pp. 57-80.

[その他]

田中秀毅 (単著) 「英語と日本語における数量表現と関係節の解釈に関する記述的・理論的研究」未刊行学位論文(筑波大学), 2014年.

KAKEN 科学研究費補助金データベース
<https://kaken.nii.ac.jp/d/r/50341186.ja.html>

6. 研究組織

研究代表者

田中 秀毅 (TANAKA Hideki)

摂南大学・外国語学部・准教授

研究者番号 50341186